

討論

ラウンドテーブル 「戦争に向かう日米関係と朝河貫一」

陶 波・増井由紀美・三牧 聖子・五百旗頭真・山内 晴子

司会 佐藤 雄基

佐藤：第三部のラウンドテーブルでは、報告者の三名の先生方に加えて日本政治外交史の第一人者の五百旗頭真先生、そして、朝河貫一研究で大著があまりの山内晴子先生に加わっていただき、今日の議論を踏まえて議論していただきたいと思っております。それでは、五百旗頭先生、どうぞ宜しくお願いいたします。

五百旗頭：どうぞよろしくお願いします。

今日は、素晴らしいシンポジウムにお招きいただき、ありがとうございます。

このシンポへの私の貢献といえは、福田康夫さんをここに来るように説得したことです。

私は、山内晴子先生の大著で朝河のことを勉強しているだけで専門家でも何でもないですが、『日本の禍機』を大変愛読しております。

大きな歴史観とか学説をお持ちの朝河先生ですが、他方で具体的状況の中で日本の行動に敏感であり、あるべき進路を歩んでいるのかそうでないかということを非常にシャープに、あるいは高く評価すると思えば厳しく批判される。そういうのは難しいですね。特に学者にとつてそれは苦手です。なかには得意な方もおられますけれども、多くの学者は大きなビジョンとか価値観とか抽象論は語れても、個々具体のことについて切り分けるのは本当に難しい

です。

勇気をもって朝河先生はそれをなされる。特に日露戦争で日本が思いもかけていない勝利を得た。そうなるを我を失うんですよね。これまで弱小国で列強の食い物になって不平等条約を強いられて、やっていけるかどうかと想っていたところ、何と大國ロシアに勝った。度を失います。国民心理が非常に大きく振れる状況です。その時に朝河先生はいち早く、日本なりによくやっていることは評価しながら、危ない、と。「禍機」という言葉、災いの兆しという意味で、今ではほとんど死語で、こんなのを他で使っている人、見たことないですけど、災いの兆しというのをいち早く感じ取られた。

今では、日本国民の識者では常識だと思います。日露戦争の後、日本がおかしくなった。勝利の後で思い上がってあらぬことをし始めた。作家の司馬遼太郎さんが代表的な人で、司馬さんの話を聞いて、そうだ、と思ってる日本人も少なくないと思います。日露戦争で偉大なる勝利を遂げて、あの将軍が偉かったとか、勲章をもらった、それに合わせて歴史を書かなきゃいけないという愚かな話になって、くだらない日露戦争史というのを編さんすることになったんですね。そこから日本はおかしくなったという話が司馬さんの説です。それが昭和に至って本当におかしくな

って、ブリキのような薄い戦車に、司馬さんは少年兵として乗せられて、本当に戦闘に巻き込まれたら確実に死ぬ、と。棺桶の中に入っている。そういう日本史しかないのか、もっと立派な日本史はなかったのか、というので日本の歴史を調べ書き始めた。

私自身、京都大学の大学院生の時に初めて司馬さんのところへ一方的に押しかけました。当時はちょうど明治一〇〇年記念だったんです。京都大学の学生たちの間での記念の大講演会をやるうと。誰に講師をお願いするかというので学生たちがわいわいやって、皆さん、上山春平とか桑原武夫とか坂田吉雄とか、そうそうたる明治維新の研究者をあげましたが、私は「京大の偉い先生もいろいろ、司馬遼太郎のほうがいいんじゃない？」って言ったら「えっ、お前、コネあるんか」「いや、『竜馬がゆく』を愛読しているだけだ」。「どうせ駄目だろうけど、駄目もどで交渉権やるよ」って言われて、それで東大阪のお宅の電話帳を調べて電話をかけたなら、お手伝いしている若いお姉さんが出てきて「ちよっと分かりませんから先生に代わります」って代わってくれたんです。「京大の時計台の第一教室で明治維新百年を記念して司馬先生に講師をお願いしたい」と。「まあ、おいで。話、聞かむ」って言って、三日後を指定されました。それで、友人と三人で伺ったら司馬

さんがにこやかな顔で迎えてくれたんです。

私の名前、読んでくれる人、いないんですよね。皆さんの中で分からずに読んで人いるかどうか知りませんが。今までバーなんか行ったら女の人が「何、これ？」って言うから「読んでら博士号あげるよ」って言っても誰も読んでくれない。

司馬さんにどうかかとちょっとテストしたくなって、学生ですから名刺持っていないけど、紙に漢字を書いて「こういう者です」って渡したんです。そうしたら「いおきべさんですか」と。「司馬さんは、この名前の人とどつかでおい会いになったことあるんですか」「いや、そうやない。昔な、古い時代やけど、尾張の国に「五百」の「旗頭」じゃなくて「木」の「部」と書く「五百木部」というのがあって、それが恐らく戦国時代に何か悪いことしようと思つて、木の部より旗頭が強そうだからそれに置き換えて、播州辺で暴れ出したんやないかと思つてそう呼んだ」と。

へえと思つて、その後、私は図書館へ行つて、姓氏大辞典で調べたら本当にそうでした。尾張氏の一分家に五百木部があり、一時期隆盛を誇り、景行天皇だか仲哀天皇だかに娘を出してその子を産んだと。もちろん側室ですけど。でも、何とかの皇子の乱で反対側について全国に四散したつて書いてあった。司馬さんつてすごいなと思ひました。

京大の時計台下での彼の講演会は素晴らしかったですね。あんなに人が集まったことはなかったし、あんなに沸いたこともない。

話を戻しますが、私は「司馬さん応じてくれたよ」って仲間のところへ帰つたら、「お前、何ほど話つたんか」と。私、全然、お金の話なんかしてないんですね。われわれ学生仲間は一万円の謝礼を用意してたらしいけど、「司馬さんの相場つてどれぐらいや」と聞くと、いや、桁が一つ違う二つ違つて言われて、それからちよつと悪夢にうなされました。講演の後、楽屋裏で「薄謝で申し訳ないけど」つて一万円出したら「何や、それ、変なことやめとき。それよりな、祇園のほうに場所取つてあるからみんなでおいで」言つて大ごちそうされました。こんな講演料あるのでしょうか。そういう話は朝河貫一さんとはあまり関係ないので、ここまでといたしまして。

朝河さんは具体的な状況の中でのリアリズムをお持ちですよね。日露戦争の直後からその時に認識して「災いの兆し」と呼んでいらつしやるんですね。それでいて最後にちよつと付け加えられているあとがき(注・跋(日本の宣言につきて))を読むと、日露戦争は一九〇四年から一九〇五年ですけれども、その後の日比谷焼討事件などがあり、アメリカにおける反日感がどつと高まった。それに

対して日本外交は頑張って、高平・ルート協定〔注：『日本の禍機』では「日本の宣言」というのを一九〇八年、三年後に結ぶんですね。それは、問題はあるけれども大局的に日米で太平洋問題につき協力していこう。お互いの既得権は認め合ってやろうという。これをやったことを朝河さんは口を極めて、よくこういう大局観に立って日米の破綻を回避したと賞賛しています。彼が心配していたのは日本は清国、中国と必ずぶつかっていく。門戸開放、機会均等、そして、主権と領土の保全、そういうことを日本がながいしるにする、と。日露戦争前には、日本はジョン・ヘイのそういう宣言に応じて、アメリカ、イギリスと同調することで支持を得ながら日露戦争に勝ったんです。勝ったから、しかし、やっぱり度を失ってしまつて、われわれも強いんだ、ヘゲモンになれるんだというような驕りが強くなつていった。

もし、朝河先生が今これをお書きになつたら学界では批判をされるでしょう。大事なところが抜けているじゃないか、と。実は翌年、一九〇六年には満洲でのさばつて、まるでわが領土のように振る舞う陸軍の姿があつたんです。それを時の西園寺公望首相は抑えようとして現地視察するんですけど、勢いに乗つた陸軍を抑えられない。それを止めたのが元老の伊藤博文でした。西園寺首相の官邸で「満

洲問題に関する協議会」を一九〇六年五月二二日に開かせた。そこで児玉源太郎参謀次長という陸軍の実力者に対して、真つ向から伊藤が説教するんですね。あなたは考え違ひしとる。われわれは条約によつてこれこれの權益を得た。しかし、まるであの地域全体が日本の影響下に入ったなんて、「利益線」であるかのように、いや「主権線」であるかのように前提でおっしゃっていることは全部間違つていると、真正面から切り付けて、そして抑えたんですね。そのことは、今、まっとうな歴史家は非常に評価する。当時は資料が全然なかつたから朝河さんは分からなかつた。でも、もし分かつていたら、それは口を極めて評価されたでしょうね。よくぞやつた、と。それこそが大事なことで、あの中国、そしてアメリカと共存していくためにはそれしかないんだと。よくやつたけど、「だのに、その後」という話がまた出てくると思うんですけどね。

そういうので、あの時点において、今では司馬さんによつて常識化した日露戦争後、日本がおかしくなつていった、その瞬間での朝河さんの「災いの兆し」というシャープな洞察、これは素晴らしいことですね。

その時から、『日本の禍機』の後ろのほうで書いていますけれども、これから日本は東洋最大の問題である清国との間、それから、他方で、世界最富強国、米国との関係に

おいて大きな破綻が危惧される、そうはつきりと指摘しているんですね。そして、まさに満洲事変後の一九三〇年代、日本はそれにのっかってしまい、昭和二〇年に身を滅ぼすことになりました。日本史上、外地へ軍隊を派遣して敗れた例は、白村江の戦いなど、いろいろあります。しかし、わが国全体が敗北する、滅亡するといったことは昭和二〇年ただ一度切りです。それを迎える。それは朝河さんの洞察、警告を十分のみ込めなかった、日本が。そういうことになると思います。

私は、山内さんの本を通じて勉強するぐらいで朝河さんの教えはもちろん受けておりませんが、でも、案外、私は朝河さんの弟子かなと思うところがあります。

戦後、日本外交について私が一貫して主張していることがあります。歴史の教訓に学んで戦後日本外交は、アメリカとの同盟、そして、中国との協商、協商というのは同盟ではなくて、悪くない関係、相互利益であるならば、それを整え得るような悪くない関係、「日米同盟プラス日中協商」、それが日本のこれからの存立にとって重要なことだとずっと主張しているんですね。

ですから、最近、中国がけしからんという人が「五百旗頭さんは甘いな」というふうな批判されたりもするんですが、私は息の長い歴史的現実からみているので変わらない。

中国と難しくなる。しかし、お引越しできない、永遠の隣人なんですね。

そういう具体的な状況の中で朝河先生が警告されたこと、おっしゃることは、素晴らしいですが、それは朝河先生にとってはほんの一端です。大きなところは彼は本物の歴史家なんです。今日もボツマン先生が紹介されていたように、弥永千利が本当の学者か分かりませんが、厳しいこととおっしゃる。それだけ朝河先生は大変な学問の道というのをしっかりやっていらっしゃるんだと思うんですね。

彼の博士論文、Ph.D.論文は「六四五年の大化改新」なんです。大化の改新のポイントは何かといえば、あの頃は、聖徳太子さんに代表されるように仏教という普遍思想が入ってきた、それから、中国の、当時、律令国家の政治社会制度、そういうものに触れたんですね。

それまでは割とこの島国の中で井戸の神様、山の神様、みんなありがたいもんだっていうふうな生きていたところから、漢字が入ってきて、稲作が入ってきた。次の大きなウエーブとして、仏教という普遍的価値観と律令国家の制度というものが入ってきた。ものすごい変換点なんですね。その変革期の中で中大兄皇子、蘇我入鹿、血で血を洗うような激しい争いをしながら、でも、その中で国家は分裂せず、一体性を保ちながら大きな変革に向かうんですね。そ

の大きな変革に向かうことができたのは、一体性を失わなかったから。今のアメリカみたいに、トランプ派対反トランプ、本当に心配ですね。それに劣らない大きな難しい変革の中です。日本は一体性を天皇制を土台に保ちながら大きな変革に立ち向かっていったと朝河先生は見るわけです。一〇〇年かけての大変革です。当時、ローマ帝国衰退後の世界で、唐は世界最高の文明でした。それを何とかものにしようというので、白村江の戦いで負けた後、五〇年かけて大和盆地に平城京、律令国家の首都のミニチュア版をつくったんですね。そのお守りに東大寺を造って、そして、鑑真まで呼んできて精神文明の深いところをわがものにしようとした。すごいことなんですね。外にいいものがあったらそれを学ばずにはおれないというのが、日本民族のいいところだと思えます。一体性を失わずに済んだのは、天皇制が大きかったというのが、彼の主張です。それが一回だけではなかった。明治維新で同じことが起こったんです。今度は近代西洋文明に対してです。仏教、それから律令国家の時に劣らない産業革命以後の近代西洋という大ウエーブが黒船とともに来たんですね。それを超えていく上で奥羽列藩同盟の戦いなどありますけど、戦は最小限にとどめつつ、分権的な幕藩体制から中央集権国家を、天皇制の権威を使いながら一体性を持つてつくり上げた。そ

して、司馬さんの言葉でいう『坂の上の雲』の時代になりますが、日清、日露の時代に近代化を遂げる。立憲君主制をものにして、非常に大きな近代西洋の挑戦をまた乗り越えることができたんですね。

二度まで一体性を天皇制の下で失うことなく大きな変革を遂げた。そのことを朝河ほど認識している人はいない。彼はそれ故に日米間が危なくなってきた真珠湾の前に、これをどう食い止めるか、いても立ってもおられなくなった。朝河さんの本質は大変な愛国者だった。そして、普遍的価値を大事にするリアリストでもあったというお話が先ほどありましたですね。

こちらにおられる増井先生の御報告の中に「正義は恵まれた大きな国の自己犠牲にある」という言葉がありました。これはとんでもない理想主義の言葉ですね。強い国は、みんなヘゲモンになって他国を制圧しようとする。近代の帝国主義はみんなそうです。日本もそう。アメリカだけちょっと違って、普遍的価値観において、それをやらなきゃいけないという思いもあった。それを一番強くなったアメリカが、ある種、自己犠牲のできる、つまり世界のお世話ができる存在であるべしという理想主義を持っている。そういう思いがアメリカにあります。ありますけれども、他方で、大変、独善性が強い。普遍的価値を持っていて、それで、

ますます独善性が強くなる。こういう難しさの中で、日本はどうするか。

理想主義者であり愛国者である朝河さんは、日本にもそうなるてもらいたい、力を持ってもらいたい。それを持ってほしいままに清国が弱いからと虐げるのではなくて、それをしっかり支えるような存在になってほしい。そういう思いの非常に強い朝河さんでした。

従って、無意味な日米戦争をやめてくれと叫びたい。そのために最後の手段としてルーズベルト大統領に天皇に親書を出して、そこで食い止めてほしいと願った。これは山内先生の本に書いていらつしやるところですけれども、結局、天皇宛のルーズベルト親書は間に合わなかったし、かつ、書かれたものは朝河先生の草案とはだいぶ違っていたんですね。ルーズベルトとして自分は最後まで平和を望んでたんだよという米国政府のアライのためのものだったのではないでしょうか。

戦争が始まった結果、日本が昭和二〇年に敗北して本當にひどいことになった。その瞬間に実は朝河理論が実現します。大化の改新の研究をやって、明治維新を觀察して、危機の中で天皇制を土台にした一体性を保ちながら大改革が、もう一度戦後改革の中で行われることになりました。実際の歴史は朝河の思ったとおりには動かなかったけれど

も、彼の洞察は深く、その歴史が三度繰り返される、すごいもんだなというふうに思っています。ちよつと長くなつてしまいました。

山内・山内でございませう。今、五百旗頭先生からご紹介があった『日本の禍機』、最初は『日本の危機』という題名に朝河はしていましたけれど、『日本の禍機』と命名したのは坪内逍遙なんですね。朝河はアメリカにいますから、坪内逍遙は三校までして、この本は出版されます。ですから、坪内逍遙がすごくこの本を評価していた証拠だと、今、お話を伺いながら思いました。

私は、増井先生が紹介されたタツカー未亡人宛朝河書簡の「求めてゐる大きな正義とはまともに生きる権利です。正義はより恵まれた国家が自己を犠牲にすることを意味します」という倫理はとても大切なメッセージだと思っています。三牧先生が緒方貞子さんの三〇年代の日本のナショナル・リベラルの批判を紹介してくださいましたが、緒方さん自身が解決策として考えられたのが、アマルティア・セン氏と共同議長として二〇〇一年の人間の安全保障委員会を創設されたのだと私は思っていますね。「山内『朝河貫一論』早稲田大学学術叢書第七巻、二〇一〇年、四二〇―二二頁」。この倫理は今のウクライナやガザ地区にも当てはまるのではないかなと思っています。いかがで

1930年 ACLS（全米學術団体協議会）日本研究委員会 創立メンバー

ACLS Bulletin, No 14, November, 1930

Committee on the Promotion of Japanese Studies:

Langdon Warner, Fogg Museum of Art, chairman;

K. Asakawa, Yale University;

Edward Capps, Princeton University;

Evarts B. Green, Columbia University;

Berthold Laufer, Field Museum, Chicago;

Kojiro Tomita, Boston Museum of Fine Arts;

Mortimer Graves, secretary;

[*ACLS Bulletin*, Candace Frede 出版情報部長から資料提供。

山内『朝河貫一論』365頁～] [1931.9.18. 満州事変（柳条湖事件）勃発]

ございましょう。

それから、陶先生がデービスを紹介されましたが、私はデービスと共に宣教師の子として京都で育って、IPRと共に活躍したジェローム・グリーンの説得によって朝河がメンバーとなりましたACLS（全米學術団体協議会）日本研究委員会をご紹介したいと思います。

その時IPRアメリカ会長だったグリーンと、ACLS事務局のモーティマ・グレイヴズが、朝河に「メンバーに入ってください」と一生懸命説得します。そういう手紙が何通も残っております。それで、ようやく朝河は七人の創立メンバーの一人となるんですね。委員長はこの図にありますように、ラングドン・ウオーナーです。ラングドン・ウオーナーも非常に朝河のことを尊敬して、自分達夫婦の『推古期の日本彫刻』の序文を「書いてください」と頼んで、序文を朝河に書いてもらって一九二三年に出版しております。そして、富田幸次郎というボストンミュージアムに五〇年勤めることになる人も、このACLS日本研究委員会の最初からのメンバーですね。このメンバーリストは、ACLSのCandace Frede 出版情報部長に資料を依頼して送って頂いたもので、感謝しております。

「日本研究委員会の資金の使い方に関する意見」といって、事務局のグレイヴズがメンバーみんなに宛ててどうい

うふうに資金を使ったらいいかということを書簡で聞くんですね。そうすると、朝河は「資金は東洋に関する初歩的な学習促進のために使うよりもっと高度な研究をする大学院生に使用したほうがいいと思います」と回答します。他のメンバーも同意見だったので、一九三二年に ACLS 日本研究委員会が計画しておりましたハーバード大学夏期学校に、大学院生のポートンとライシャワーとファーズの三人が参加して、親密な友情を育んだ出会いの場所になるんですね。ポートンは「ラングドン・ウオーナーの講座が最高に刺激的だった」と書いております。この夏期学校は、あとは二回ぐらい他の大学で行われています。

ACLS 日本研究委員会が最初に日本に送った留学生というのが、五百旗頭先生が監修されました『戦後日本の設計者・ポートン回想録』を書くヒュー・ポートンと、駐日大使になるエドウィン・ライシャワー。ライシャワーは明治学院の宣教師の宿舎で生まれております。それから、アメリカの心理作戦「日本計画」に重要な役割を果たしたとされるチャールズ・ファーズ。ポートンと同じく、このファーズはプロテスタントの中の平和主義者のクエーカーの生まれなんです。この三人は日本に留学している一九三六年に二・二六事件に遭遇して、昭和天皇の態度をちゃんと見ているわけですね。

ウオーナーによる日本研究委員会最初の報告書も ACLS の Frede 出版情報部長が送って下さった Bulletin にありますが、ウオーナーは日本語とか日本歴史とか日本文明を研究することによって得られる職業というのがとても大事だと書いております。それが実践されて、一九三八年にはポートンはコロンビア大学で日本語・歴史・文化を教え、そして、一年後にはライシャワーがハーバードで教えております。[Rudolph Janssens, Andrew Gordon, "A Short History of the Joint Committee on Japanese Studies"]。メンバーリストというのを先ほどお見せしましたけれども、一九三七年六月のメンバーリストから朝河貫一と富田幸次郎が外れているんですね。これは一九三六年一月の日独防共協定締結、一九三七年七月七日盧溝橋事件から日中戦争に発展したことや、IPR のエドワード・C・カーターの日中戦争の原因を検討する「インクワイアリー (Inquiry)」プロジェクト立ち上げの影響というふうなものもございます。

そして、一九四〇年九月二七日独伊三国軍事同盟が締結されて対日批判が増していき一九四一年七月にポートン、ファーズ、ライシャワーが日本研究委員会のメンバーとして揃います。図が示すように、ポートンがセクレタリーとなって事務局を担っております。そしてファーズもメンバ

1941年7月 ACLS 日本研究委員会メンバー

1936.11.25. 日独防共協定 1937.7.7. 盧溝橋事件→日中戦争
1940.9.27 日独伊三国軍事同盟 1942.8.1 米対日石油全面禁止
ACLS Bulletin, No. 33, July, 1941 Committee on Japanese Studies
Chairman, Serge Elisseeff, Harvard-Yenching Institute /
Secretary, Hugh Borton, Columbia University /
Kenneth W. Colegrove, Northwestern University; /
Charles B. Fahs, Pomona College; /
Evarts B. Greene, Columbia University; /
Archibald G. Wenley, Freer Gallery of Art

Corresponding Members: Edwin O. Reischauer, Harvard University;
G. Nye Steiger, Simmons College;
Florence E. Walne, University of California ;
〔*ACLS Bulletin*, Candace Frede 出版情報部長から資料提供〕

ーになっています。ライシャワーは通信メンバーになって
おります。一九四一年八月にはアメリカは対日石油禁輸な
どをした時代ですね。

第二次世界大戦勃発後は三人の所属が変化いたしました。
コロンビア大学のフアーズは一九四二年のメンバーリスト
からOSS所属になっておりますし、ハーバード大学のラ
イシャワーは陸軍所属になっております。コロンビア大
学のポートンは一九四二年一〇月中旬から國務省所属に
なっております〔『ポートン回想録』一二四頁、山内著
五四〇頁〕、このことは対日政策でACLS日本研究委員
会が重要な役割を担う位置にあったことを裏付けると思
います。

一九四一年七月、COI（情報調整局）が発足いたしまし
て米國議會図書館のマクリーシュ館長の呼びかけでACLS
（全米学術団体協議会）、それからSSRC（全米社会科学研
究協議会）、NARA（国立公文書館）の要人が集められた
わけですね〔加藤哲郎『象徴天皇制の起源…アメリカの心
理戦「日本計画」六四頁〕。五百旗頭先生によると、マク
リーシュ館長は大統領演説の起草者で後に國務次官補に
なった人物です。このマクリーシュ館長が朝河の大統領親
書草案を大統領に手渡したということを朝河貫一研究会の
故齋藤襄治先生がマクリーシュ館長から直接確認をなさつ

ております（山内著五一〇頁）。そういう関係でございませう。

一九四二年六月、COI提出の機密文書の「日本計画（最終草稿）」、これは先ほど言いましたコロンビア大学のフアーズが重要な役割を果たしたとされておりました、八月にマツカーサーも承認しております。その中には日本の天皇を慎重に名前を挙げずに平和のシンボルとして利用することということが書かれていますけれど（加藤著一五四、二二二頁）、天皇の扱いは、ポートン、フアーズ、ライシャワーが極東政策の立案と遂行を通して朝河の先ほど五百旗頭先生からご紹介があった博士論文『大化改新』以来の天皇制度に関する朝河の学説、つまり、大化改新や明治維新という日本の歴史において圧倒的に優れた異文化を習得して適応する制度的大変革を成功させる鍵は常に天皇個人ではなく天皇制度だということですね（山内著第八章）。この朝河の学説に基づくと天皇制度と理想とする「民主主義」の異文化融合の戦後構想の実現に大きな役割をこの三人が果たしたことを意味すると思っております。ありがとうございます。

五百旗頭…山内先生の今の報告に一つ質問してもよろしいかしら。二〇世紀に王制、王様を戴いて戦争を始めて負けた国がすべて君主制を終え、共和制に代わっている。唯一の例外が日本なんです。ワシントンで戦後日本をどうすべ

きであるかという時に一番激しい議論があったのがこの点で、国務省の幹部たちは当然にわれわれ若者が血を流している相手は天皇なんだと。だから、勝利した暁には天皇制を倒すことでなければ勝利は完成しないと。そういう議論の人が多くて、それ一色に見えたところが、でも、プラン作りは知日派を使わなきゃいけない。その中心にいたのがポートンなんですな。

ポートンは一九四二年夏、四〇歳のコロンビア大学の助教授で国務省にリクルートされて、対日プラン起草の中心となります。非常に朝河の教えを受けていたことは、山内先生のおっしゃる通りです。「天皇制民主主義」なんていう概念はなかなかアメリカの方では出てこないんですね。それは朝河博士の研究なしに考えられないでしょう。朝河理論あってこそその知日派の共通認識ではないでしょうか。ライシャワーも、ポートンも、フアーズも。

もう一つ、しかし可能性があるのは、ジョージ・サンソムという、イギリスの外交官にして日本史についての碩学（せきがく）ですよ。その朝河とサンソムとの間に話があったのかどうかというのが伺いたいところです。

ポートンは一九二八（昭和三）年に日本に最初に留学した時、日本のことは全然知らなかった。けれども、外務省の広告でジョージ・サンソムが『日本文化史』の勉強会、

研究会をつくるから誰でもおいでという広告を見てポートン夫妻は行ったんですね。その結果、初めは三〇人いたけど、毎回、半分ずつ減って、数回行ったら彼一人になって、世界一の碩学、日本の知の専門家から個人教授をただで受けたんです。そこでサンソムもやはり天皇制を重視するイギリスらしい考え方だった。そのルーツもあり得るなど思うんですけれども、朝河とサンソムの間には何か話があったかどうかを教えてほしい。

山内…サンソムと朝河は関係があつて、そのポートンを介してかもしれないですけども、お互いに、結局、方向性というか、天皇のいる日本と国王のいるイギリスですから、唯一分りあえるという関係。「分りあえる」(Grave penetrated) という言い方をサンソムはしていたと思います。『書簡集』英文二〇二頁)。

五百旗頭…では、実際にあつたと。

増井…『朝河貫一書簡集』を利用して研究される人が多いと思いますが、そこに収められています。サンソムがコロンビア大学に来た時です。

五百旗頭…戦後ですか。

増井…いいえ。戦後ではなくて一九三〇年代です。コロンビア大学で講義を担当していました。その前に『日本文化史』を出版していますから、サンソムの本は世界中で読ま

れていたわけなんですね。その時にサンソムはニューヘイブンにご夫妻で訪ねているんです。戦争が始まってから朝河貫一はサンソムのことを非常に気にかけている、そういう内容の手紙も数通『書簡集』を収められています。

五百旗頭…天皇制についてまで話はしてないんですか、手紙で。

増井…『書簡集』の往復書簡にはなかったと思いますが、朝河貫一は日本研究者で当時最も優れている人としてサンソムを挙げています。ある推薦状でサンソムを非常に高く評価しています。そして、彼に比べたらライシャワーもポートンもまだ完成された日本研究者ではないと書いています。

二人は相当に尊敬していました。歴史学の面でも朝河の封建制の研究とともにサンソムの『日本文化史』も、フランスの歴史家マルク・ブロックに引用されています。日本研究者としてサンソムは朝河と同じように中世の日本語を研究し、翻訳も出版していますが、本人は非常に謙虚な方で「自分は歴史学のトレーニングは十分に受けていない」というようなことを朝河に書いています。けれども、朝河は高く評価していて、サンソムの書いた本を授業で使っています。そういったことも伝えてある手紙もあります。**五百旗頭**…なるほど。どうもありがとう。結局は朝河とサ

ンソムという、それぞれ深い日本史の勉強をした人がその中で天皇制は保守反動の装置ではなくて、全国民を大事にして大きな変革ももたらしているんだ、平和ももたらしているんだという観点に立って、それを受けたポートンやライシャワーが、グルーの応援もありましたけれども、戦後あれだけ日本に厳しい、あるいは天皇に厳しい雰囲気の中で平和的に天皇制を残すことの知的土台になったという話、よく分かりました。ありがとうございます。

三牧…ありがとうございます。五百旗頭先生は、日本外交の基軸として日米同盟と日中協商とおっしゃられました。まさに朝河と重なるところで、五百旗頭先生の中に、一〇〇年越しで朝河の姿を見る思いです。少しばかりご質問させていただきます。

一つは中国との関係です。朝河の時代も日本は中国との関係で苦労しましたが、今日でも難問です。先生は、日中関係について人権問題など批判するところはもちろん批判しつつ、相互利益がある部分での協調を諦めてはいけないと指摘されました。この趣旨に深く賛同いたします。その上で、今や日本はアメリカとの間ですら価値の共有は難しく、いろいろ波風が立っています。中国のように価値や政治体制がまったく異なる国とどうやって共存していくか。国は引つ越せないのこの課題を諦めてはいけないわ

けで、ぜひ先生の展望を伺いたいです。

二つ目は、今後の日本についてです。先ほど先生が言及された山内先生の『朝河貫一論』でも詳細に検討されていますが、朝河は大化の改新と明治維新に注目し、常に日本には模範がいて、大化の改新の時代はそれが中国であり、中国のすばらしいものと日本の固有のものとうまい融合をはかった。その後、日本にとつての模範は中国から西洋へと移行した。明治維新とは、西洋のすばらしいものと日本の固有のものとをうまく融合させる試みだった。これが朝河の分析です。

朝河は、今の日本を見たらなんと言うでしょう。今の日本は様々に行き詰まっているように感じますが、まず、どの国を模範とすべきなのか。今日ご紹介したように、アメリカはもはや民主主義においても模範とは言えない。むしろアメリカの非常に暴力的な面やひどい経済格差などは、真似てはいけない部分です。かつて日本は中国やアメリカを模範として発展してきましたが、今日はいずれも模範にできない。先生は、今の日本が模範とすべきはどの国だとお考えでしょうか。

あるいはいずれかの国を模範に見定めて、その国のようになるためにまい進するような、今まで日本がやってきたような発展方法そのものが今、限界を迎えているのかもし

れません。今後は、誰かを真似るのではない、新しい発展の道を探していかなければならないのかもしれない。日本の行き詰まり要因は何か。それを、どういう発想で打開していけるのか。

五百旗頭先生の中に朝河を見る者として、以上二点についてお伺いできればと思います。

五百旗頭…ありがとうございます。私が京都大学で勉強しましたが、高坂正堯という先生をご存じでしょう。彼の『国際政治』（中公新書）という本の中の主眼は、国際政治とは「力の体系であり、利益の体系であり、そして、価値の体系である」というテーゼです。日本はそれでいくと戦前は「力の体系」に狂って破綻したわけですよ。それに反省して、教訓を学んで、戦後は平和的外交、経済を中心にした平和的な手段で、つまり「利益の体系」を軸として再生を図った。冷戦終結の時には、世界第二の経済大国までのし上がったいたわけですね。ところが、バブルははじけて不良債権の山を片付けるのに一〇年かかったり、その後も失われた一〇年、二〇年、三〇年ということになって、今、おっしゃるように日本はもうすっかり行き詰まった感があります。

ただ、力の体系、利益の体系で大を成しながら退潮を迎えた日本、もう一つの「価値の体系」、文化とスポーツに

ついでには案外捨てたもんじゃやない。例えば大谷君を見てください。その他、バレーであれ、バスケットであれ、サッカーであれ、大したもんですよね。アニメの力でもあるんでしょうけど。非現実的なヒーローのアニメを読んで若い人が本当にそれを自分ができるかなとやり始めた結果が、いろんな分野での大活躍の選手が生まれています。だから、文化・スポーツの分野はまだ捨てたもんじゃない。

ただ、悲しいことに日本政府の意識が古い。特に文化・学術の大事さを意識しないで、韓国なんかそれを非常に意識して、今、それで雄飛しているんですけど、日本は民間では事実として個人はやるんですけども、国としてそれが大事だという自覚が乏しい。残念ですけども、そういうふうがいいところを国とその制度が支えていない。

だけど、文化・スポーツがよければ、他の力と利益は要らないかと、そんなことはない。総合力ですから、力がなくてそれで平和主義だからいいんだと思っていたら、侵略国がそれでは遠慮なく頂こうかというふうな姿勢を取るわけで、戦前の日本は事実そこに対してそうしたし、今の中国や北朝鮮やロシアはまさにそういうふうな古いスタイルを続けています。

つまり、二〇世紀の二つの大戦を経てジャングルの掟ではいけない。力は正義というので全部を片付けちゃいけない

い。やはり小さな国であっても存立ができるようにしなきゃいけない、と朝河さんもおっしゃっておられるんですけど、そのことを人類は国連体制でつくったわけですよね。自衛のための戦争以外は国連憲章違反であり国際法違反である。それがあから、例えば太平洋でもうすぐ水位が上がったら沈んでしまいそうな小さな国であっても、警察が一〇人いるかないか、そういう国で、日本の暴力団でも占領できるような島、国でも存立できる。どんな国であれ侵略すれば、国連違反になってしまう。国連体制、「五人の警察官」、拒否権を持つ五大国が管理を委ねられてる安理が動き出すわけですよね。それにやられたらたまったもんじやないから弱小国も存立していられる。

例えば、北朝鮮やサダム・フセインのイラクのように、地域覇権を求める中堅の国程度であれば、五人の警察官、五大国が割れなければ抑えられるんですね。だけど、今や五人の警察官の何番目か知らないけど、その警察官自身が隣のウクライナを侵攻するとうとうんでもないことが第二次世界大戦後七七年にして起った。そういう中で、私は大事なのは意外に日本外交だと思ってるんです。

近年、安倍首相の時代からですけれども、トランプがむちゃくちゃやりましたね、三牧さんがお示しくださったように議会を襲うだけじゃなくて、国際秩序も彼は大嫌いな

んですよ。NATOはつぶしたいし、G7サミットなんかもと晋三に任ずとかって出て行っちゃうわけですよね。トランプ時代の米欧の亀裂っていうのはひどくて、メルケルさんは、顔も見たくもないというぐらいに関係が悪い。それをプーチンはチャンスと見たんだと思うんですよ。米欧が一緒になって抑えることなんかできっこないというふうな機会と見たんじゃないかと疑ったりするんですが、そこまで大きく割れている、バイデン大統領も民主主義サミットみたいなことをやって、アメリカの独善性の中で民主主義の普遍性価値をみんな認めるといっても、逆に分断を進めてしまうことになるわけです。プーチンにとって民主主義諸国の劣化と対立は、よい機会と見えたでしょうね。

そういう中で、大事なのは、日本のような普遍的価値は信じているし、民主主義が一番いいと、それよりいいものはないから大事にしたいと思ってるけれど、それを錦の御旗にしてよそを上から目線で裁き、価値剝奪するということは日本人はしたくないんですね。それぞれに歴史があり、自律性があり、アイデンティティーがある。それを尊重しながら協力したい。つまり、多文化間の協力をリードできるのは日本だと思っんです。他はみんな原理主義なんです。ローマ法で育った西洋の国はみんなそうだし、ソ連もその一派である。中国はちよっと違って、ローマ法

的な、誰もが全て一遍、普遍的基準はないんです。何があるかといえ、宗主国である中国が全てを決める。ルールは他のものたちのためにある。超法規的存在が皇帝だし、あるいは党であるし、そして中国である。それが非常にやっかいなんです。そのやっかいなのをわれわれはこなしていかなきゃいけない。永遠の隣国という宿命ですから。その中でも道理に沿ったことは聞く。日本が大事にすべきことは普遍的価値を振りかざすことではなくて、道理というものを大事にして行くことではないでしょうか。

私、ある中国の古い遺跡を北京から車で行って見た時に感心したんですけれども、古い時代にも政治の要諦というのは「天の道を尊重し、そして、民を慈しむことだ」と書いています。

そういうえば、西郷隆盛が「敬天愛人」といいますね。天を敬い人を愛する。これが意外にどこでも通じる。民主主義だつてそうですよね。道理、筋道、普遍的価値を大事にして、そして人間尊重、これが案外普遍性がある。ただ、普遍的価値として振りかざすのではなくて、日本はそれぞれの言い分を聞きながら、今至るところで問題が出てきた第二次大戦後の国連体制とかブレトン・ウッズを修正していく役割を果たしたいものです。

それもヘゲモンとして上に立って、じゃなくて、ファシ

リテーターとして私の言葉でいったら「よき世話役」としてやる。それをヨーロッパなんかと相談しながらアメリカ、中国という荒くれ大国をよしよししながら進めていくことが日本の役割ではないでしょうか。

陶：私のほうからもあまり時間がないので手短に。

皆さんの話を伺っていて思ったところは、やはり一方では理想主義、もう一方では現実主義とかリアリズム、この両方を。一方だけでは駄目で、両方のバランスがやはりすごく重要なのかなと思いました。

私が今日紹介した幾つかの事例もアメリカの平和主義者とかキリスト教関係者による、ある種、理想主義の立場に立った活動とかを紹介したんですけど、でも、実際に行動とか活動の結果として法律が変わったわけでもないし、日米の開戦を最終的には防ぐこともできなかったというところで、そういったリベラル派の限界というのもあったかと思えます。

そして、もう一点だけ、天皇制、先ほど五百旗頭先生がおっしゃった戦後の天皇制をどうするかというアメリカにおける議論についてなんですけど、これについては、先ほど名前の挙がった朝河と交流のあった、もしくは朝河の教えを受けていたポートンやサンソムの影響ももちろんあると思いますし、私が先ほどちょっと言及した賀川豊彦も

実はキリスト教徒でありながら天皇をすこく尊敬していて、占領期にマッカーサー元帥に宛てて公開書簡を書いています。日本がすぐ終戦して兵士がみんなすぐに武器を置いて降伏をすることができたのは天皇の存在が大きかったということ、マッカーサーにそのことを訴えかけていました。そういったことが天皇制の、当時は国体の護持とかいわれていたけれど、そういったことの重要性がある程度認識として共有されていたのではないかと思います。

増井：本日は、皆さま、お集まりいただき、ありがとうございます。予定よりも時間が超過しておりますけれども、遅くまで残っていただき、感謝申し上げます。私たちがこの一五〇周年記念シンポジウムを開こう、そして、一九三〇年代で行こうと決めたのは、今私たち一人一人に何ができるかが問われていると感じていたからなんです。何かをしなければならぬ時があると、悶々としていたのです。

朝河も一九三〇年代、アメリカでこのように考えていたのではないかと思います。そして行動していたことが残されたものから、資料などから見えてきます。時代を見るのに、私は二人のアーティストを取り上げましたが、ここでも議論になった理念や理想を作品に表現していたのだと思います。当時のリアルな感覚が作品を通して今に伝えられ

ています。時代の問題に向き合った個人の行動は未来に繋がっていると確認できます。

今、毎日のように破壊された街の映像を目にしながら、政府や国連の動きにもどかしさを覚えます。ただ、ガザに對してアメリカの市民がやはり大統領のやり方にノーと言っている、と報道が伝えていきます。

今日、三牧先生が見せてくださった映像からもそれが確認できましたが、やはり個人の行動のあり方が、世界的に今、問われている時代なのだと思います。

朝河貫一は膨大な資料を残しています。イェール大学に七〇箱強あるんですね。資料があるところには研究者が集まりますので、朝河が残したのからそのメッセージを読み取り、未来に向かって何かつくることができるともいえないと考えます。私たち朝河貫一研究会はそこに参加していきたいと思っております。

本日はありがとうございます。私は会長として最後の言葉を述べる役割が与えられていましたので、これで閉会の辞とさせていただきます。ありがとうございます。